

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成23年11月8日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 医学研究科予防医療学教室

職 名・学 年 医学専攻博士課程4回生

氏 名 武 内 治 郎

助成の種類	平成23年度・若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表助成	
研究集会名	第5回国際ワクチン会議	
発表題目	Factors associated with high-levels of measles, rubella, mumps and varicella antibodies among Japanese university students	
開催場所	アメリカ合衆国ワシントン州シアトル市 ザ・シアトル・マリオット・ウォーターフロント・ホテル	
渡航期間	平成23年10月1日～平成23年10月5日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> 有(画像2点)	
会計報告	交付を受けた助成金額	150,000 円
	使用した助成金額	150,000 円
	返納すべき助成金額	0 円
	助成金の使途内訳	航空券往復料金、宿泊費の一部に充当

私は京都大学教育研究振興財団による助成のお蔭で第 5 回国際ワクチン会議にて学術成果を発表した。以下に、その概要をご報告する。

そもそも何故国際発表を行うに至ったかをまず述べる。学部生時代の私には国際発表というのは雲の上の人のみが行うとんでもない行為であり、よもやこのような所業を自分が行うとは想像もつかなかった。しかし大学院進学が決まってからは、わざわざ天下の京大に進学するのだから一度は記念にと、漫然と考えていた。予防医療学教室にて院生生活が始まりカンファレンスに参加していると、ある回で当研究室に出入りされている医学専攻博士課程の先輩が研究結果を報告された。どうやらその内容で国際学会に発表されるとのこと。それがまた出色の出来で、京大医学部の大学院 4 回生ともなればこれ程に優秀なのかと度肝を抜かれた。後に判ったことだが、その方は出身大学も京大で、所属研究室の同期の中では最も優秀だそうだ。勉強の類に自信がなく、ましてや京大出身でもない私には遠い世界に思えた。

その後、私が 2 回生、3 回生の際にはまた別の先輩院生が、カンファレンスにて国際学会での発表内容を提示されていた。その頃には、国際発表といっても地続きの世界に思えるようになった。学位研究テーマで処女論文執筆も開始しており、発表するテーマは 3 本抱えていた。その中で、研究のメインテーマを国際発表に用いることを密かに決意していた。

4 回生になり、既に国内では発表もいくつかこなし処女論文も投稿が近くなり二本目の論文作成も進めつつある進捗だった。ようやく研究の世界を理解し、積極的にグラントを得ることが研究していくためには必要であると考えようになっていた頃、ふと京都大学教育研究振興財団のホームページを発見した。運よく国際発表助成には採用になった。しかし国際会議自体の採択通知はまだ後である。肝心の採択がない場合は辞退を覚悟していたが、これまた運よく採択された。あとは渡航して発表である。

国際会議はシアトルで行われ、勿論英語での発表である。しかし私には英語の素地はまるでなかった。我ながら全く泥縄であるが、なんとか切り抜けなければならない。研究室や周りの人々には内緒で、英語学校に通った。プレゼンテーションに絞ったレッスンをネイティブからマンツーマンで受け、お茶濁しではあるが何とか体裁を整えた。日本語における「発表」と英語における「プレゼンテーション」は精神性も異なることを学び、収穫はあった。英語学校の費用は高くて大学院の学費も自分で稼いで納めている身分には大変な負担だったが、助成が下りたおかげでこんな無理も出来たのだと感謝している。

いざ、シアトルへ。渡航経験自体がまだ 3 回目の私には全てが真新しい。発表の前の晩には英語の読み原稿を 20 回ほど音読し、当日にポスターを掲示しに向かった。今回は、頼もしく親切な指導教官の先生もいない。目標は、たった一人でもいいからコミュニケーションを成立させ、質問した方に納得して頂くこと。思いを胸にポスターを貼りつけていると、貼り終えるや否や欧米人と思しき老紳士が話し掛けてきた。"Is your paper?" "Yes." あとは無我夢中であるが、見るからに若輩で東洋人の私にゆっくりと丁寧な英語で話し掛けて下さったのは覚えている。老紳士の科学者にはしっかりと微笑み立ち去って行った。いきなり目標を達したことに、私は密かに涙ぐんだ。その後も話し掛けてくる方は相次ぎ、結局 9 人もの方がたった 2 時間のポスターディスカッションで質問して頂けた。もっともそのうち 3 人は日本人だったが、これも貴重な思い出であ

る。その中には、東大の大学院生でシアトルに留学中の方もいた。このように、海外で思わぬ日本人同士の出会いも嬉しいものである。

研究内容自体は、結論としては現代の欧米では既に当たり前の内容だったが、提示した日本でのデータに興味を惹いて頂けたようだ。この発表を通じ、予防接種後進国である日本の現状を知って頂きたいという私の目論見は叶った。

国際会議での招待講演は、素晴らしいものであった。豊富なデータを用い、かつ未来を感じさせる内容だった。スケールが大きく将来のヴィジョンを示すプレゼンテーションであり、私は1回生の時に先輩の発表を聴いた時の様な衝撃だった。海外に出ればまた科学の世界が広がる。科学は広い深い。その広く深い科学を共用するために、英語がコミュニケーションのためのツールとなる。初めての国際発表は、私の初めての英語への挑戦でもあった。

大学院生の当初の頃は、院生生活の思い出に国際発表を行い、酷い出来で「やり逃げ」するつもりだった。しかし扉の向こうに広がり深まる世界が覗けたからには、背を向けるのは勿体ない。今回の国際発表を通じて英語が得意になった訳ではないが、こうやって学ぶ契機を求め続け前進し続ければよい。例え今は貧弱な英語力でも、国際発表を10回こなした頃には、また査読付き国際誌に10本採択させ頃には、今よりかは幾分ましになっているだろう。これからが科学者として本当の挑戦である。国際発表自体のみならず、国際発表を道標に、採択されるような研究を志し、また英語への挑戦を開始したことが最大の成果と自分では思っている。

貴重なこの機会を与えて頂いた京都大学教育研究振興財団には、あらためて心より御礼申し上げます。

